

た。著者はこのパターンの差がイネの品種の差に対応すると考えている。この主張は我々考古学研究者にとつては有意義である。これまでも、農具や水用立地などの研究から、弥生時代後期に農業技術革新の画期を考え得ることは指摘されていたし、現代のイネの品種分布から類推して、冷涼な地方での稲作開始のためには、感光性品種から、感温性品種への改良があったろうことは推測されてきた。

しかし著者の主張のように、コメ遺体そのものから、品種改良を証明できるとすれば、これほど強力な武器はないのである。今後コメ遺体のデータは増加するであろうし、著者の提示した方法にもとづく、研究が進展すれば、コメ品種の地域差や改良の歩みはより詳細に判明することであろう。その点に、著者の研究の重要性がある。

本書ではこのほか、これまで何かにつけて論争の的となった中国河南省仰韶遺跡のコメ圧痕についてもストックホルムにある原資料を直接に分析した結果が報告されていて有益である。

巻末には著者の論述の証拠となったコメの計測値の基礎資料がすべて集録されているので、論述に疑問が生じた場合、読者は資料の処理そのものの検討から出発できるし、今後の新しいデータとの比較も可能なので、有益である。

土の中から出た一粒のコメも、自然科学的な研究によつて、日本の歴史解明の重要なデータになることを本書は明らかにした。この研究法は古代史のみならず、中世史、近世史にも拡大されるべきであるし、その点で、考古学以外の専門家にも一読をすめたい。

本書は、戦後における考古学と自然科学との共同研究の重要な成果の一つといえるが、この地道な研究を、軌道にのせてこまで推進された著者に敬意を表したい。

(A5版、三四六頁、図表多数、一九七一年一月刊、『考古学選書』一、雄山閣発行、定価二〇〇〇円)

(都出比呂志)

関 俊彦編

『東日本弥生時代遺跡地名表』

——中部地方——

本書は中部地方の弥生式時代遺跡の地名表である。編者は、これまで既に、東北・関東両地方の地名表をまとめ、今後西日本のそれを企画しているとのことである。

本書の構成は中部地方所在の約三千箇所の弥生式時代の遺跡を県別にまとめ、所在地、遺跡の種類、出土遺物、参考文献の順に記述し、巻末には、地方別、遺跡別、遺物別、土器型式別の索引が付けられている。また、北陸、信濃、尾張三河の三地域別に、それぞれ、橋本澄夫、桐原健、増子康雄の三氏が研究動向の紹介を行なっている。

さて、ここ十年の「地域開発」による遺跡の破壊は全国をおおい、毎日のごとく、新しい遺跡が発見されている現状においては、研究者が自分の住む一府県の中においてさえ、新資料の発見を充分把握できない

状態にある。したがって、遺跡や遺物の地名表を逐時補充し、資料のありかを明らかにする作業は重要となってきた。

近年、遺跡の地名表に類したものとしては、文化財保護委員会が発行した「全国遺跡地図」（府県別）や、地方自治体の教育委員会が独自で出版した遺跡分布図などがある。しかし、前者などでは、遺跡の所在地と、その性格の検討はつくが、その時代や出土遺物・参考文献などの記述はないから、このみでは研究上に殆んど役に立たない。もともと、その発行の意図が文化財保護行政の必要から、遺跡の所在さえ分ればよろしいというところに作成の基準をおいているからである。

その点、本書は、出土遺物や参考文献名があがっているので、その点の不備は補われている。また巻末の索引によって、利用したい遺跡名を引き出せるのも便利である。このスタイルは、斎藤忠氏の『日本古墳文化資料綜覧』に一部似ているといえよう。

さて、このような地名表を一人の手で作成する場合、完璧なものにするのは殆んど

不可能に近い。一人の手で各地の遺跡を網羅しようとすれば、記述内容にはいやでも孫引き資料が混入するし、少くとも遺物のすべてを自分の目で確かめることは不可能なわけだから、不統一や誤認が混じることは不可避である。

他方、利用者からすれば、たとえ索引で事項別に遺跡名を引き出せたとしても、その半数以上は参考文献がなく、例えば、たゞ石器が出土しているということしか知り得ぬ場合もある。もちろん、地名表とは資料搜しのワンステップであり、それでよいのだと割り切っている人にはそれで良いのだけれども。

明治以来、日本の考古学界は何冊もの『地名表』を生み出してきた。地名表にも二種類あって、前者は網羅的に遺跡を集成するもの、後者は一定の問題意識のもとに、遺物別や遺跡の性格別に集成するものである。後者の中には、地名表がそのまま学術的主張になっている場合もある。前者の類型の地名表は、日本考古学がその歩みを開始した明治期においては、一定の意義を有

していた。しかし、現在の考古学研究の水準にせよ、地名表の新しい基準と厳密さが要求されているのではなからうか。

右の分類でいえば、本書は、弥生時代に限定しているとはいえず、性格的には前者の類型に属する。今日のような、異常なまでの資料氾濫の時代において、この種の地名表は、「氾濫」を整理するものとして研究者にとって、一つのサービスマスターであり、これに払われた編者の汗の努力は多大なものであるが、単にサービスマスターに終らせろのではなく、これをステップに研究とより直結した、高次の地名表が完成されることを期待したい。そのためには、各地研究者の共同作業が不可欠となろう。

（B5版、二〇三頁、一九七一年一〇月刊、東出版発行、定価二八〇〇円）

（都出比呂志）